

ウメ新品種‘翠豊’の育成経過とその特性

片山恭佳・曾根田友暁・柴田健一郎¹⁾・川嶋幸喜¹⁾・
内山真由美・廣瀬恭佑¹⁾

Breeding Process and Characteristics of New Japanese Apricot Cultivar 'Suiho'

Kyoka KATAYAMA, Tomoaki SONEDA, Kenichiro SHIBATA¹⁾, Kouki KAWASHIMA¹⁾,
Mayumi UCHIYAMA and Kyosuke HIROSE¹⁾

摘 要

県内の青ウメ主要品種‘白加賀’は収量が低く、着果も不安定なため、安定的に高収量が得られる品種が求められていた。そこで、‘白加賀’の自然交雑実生から選抜し、‘白加賀’と同時期に収穫でき、結実性に優れ、果実は大粒でヤニ果発生率が低い早生青ウメ新品種‘翠豊（すいほう）’を育成した。育成地（神奈川県平塚市）における収穫盛期は6月4日で、収穫果中の2L規格果（直径が36 mm以上の果実）率は84%、果実重は31.8gと大粒である。また、10a当たりの換算収量は2016年～2020年のすべての年で2.0 t以上と‘白加賀’に比べて多収である。

キーワード：新品種，ウメ，早生，ヤニ果

Summary

'Suiho' is a new Japanese apricot (*Prunus mume* Sieb. et Zucc.) cultivar selected from the natural crossbreed of 'Shirokaga'. The breeding of this cultivar began in 1997 with the goal of developing a large, early-maturing green apricot with high productivity and stable fruiting, and a low incidence of gumming fruit. In the years 2016 to 2020, on average, 'Suiho' was harvested on June 4th in Hiratsuka City, Kanagawa Prefecture. The percentage of fruits with a diameter larger than 36mm in the harvested yield was 84%, and the fruit weight was 31.8g. Additionally, the calculated yield per 10 are was consistently over 2.0 tons per 10 are in all years from 2016 to 2020.

Key words: early-maturing, gumming fruit, Japanese apricot, new cultivar

緒 言

神奈川県のウメ栽培は小田原市から足柄上地域が主産地で、結果樹面積は329 haである（農林水産省2022）。県内主産地のウメは市場出荷を中心に品種をリレーしながら5月下旬～6月下旬まで販売される。しかし、ブランド力の高い和歌山県産‘南高’が収穫盛期を迎える6月初旬以降になると神奈川県産のウメは高値が付きにくい。よって、神奈川県産のウメを有利に販売するためには和歌山県産‘南高’より早く出荷することが求められる。青ウメの県内主要品種の1つである‘白加賀’は、和歌山県産‘南高’より早く

収穫できるが、結実が不安定で収量が低く、ヤニ果の発生率も高いことが問題となっている。また、漬けウメ用として主産地の主要品種となっている‘十郎’は収穫期が6月中旬～6月下旬と遅いうえ、‘白加賀’と同様に結実が不安定で収量が低い。そこで、神奈川県農業技術センターでは結実が安定し、多収な早生品種を目標としてウメ新品種育成に取り組んできた。これまでに極早生で梅干し加工に適した中粒品種‘十郎小町（じゅうろうこまち）’と、収穫期が6月中旬と育苗目標より遅いものの、果皮が柔らかく梅干し加工時の品質が高い大粒品種‘虎子姫（とらこひめ）’を

¹⁾元神奈川県農業技術センター

育成した（曾根田ら 2012）。さらに今回、育種目標に合致し、‘白加賀’で問題となっているヤニ果の発生が少ない大粒の青ウメ品種‘翠豊’を育成したので、その育成過程と品種特性について報告する。

育成経過

1. 育成経過

神奈川県農業技術センターにおいて、1997年に‘白加賀’を種子親とする78個体の自然交雑実生を得た。これらの実生苗を1998年に選抜圃場へ定植し、2002年に初結実に至った。結実した系統について、果実肥大、果実品質、ヤニ果の発生程度、かいよう病、黒星病等の罹病状況等を調査し、2009年に果実肥大が連年良好であった系統「6-1」を注目系統とした。2010年から「6-1」について収量調査を開始し、結実が安定しており、多収であることを確認した。特に、2013年は‘白加賀’が不作であったが、「6-1」は安定した収量が得られたため有望系統とした。その後も結実が連年安定し、‘白加賀’と比較してヤニ果発生率が低いことが確認できたため、品種登録に向けた特性調査を行った。‘翠豊’と命名し、2021年3月15日に種苗法に基づく品種登録出願を行い、2021年6月29日付で出願公

表された（出願番号 35292 号）。

2. 育成担当者と担当期間

神奈川県農業技術センターにおける‘翠豊’の育成担当者と担当期間は以下の通りである。

内山真由美（1997～1999）、川嶋幸喜（2000～2004）、柴田健一郎（2005～2007）、曾根田友暁（2008～2014）、廣瀬恭佑（2015～2020）、片山恭佳（2021～2022）。

品種特性の概要

1. 樹・花の特性

樹勢は強く、樹姿は開帳である。樹姿や着果部位は種子親である‘白加賀’よりも‘南高’に似る（図1）。

開花の早晩は中程度で、育成地（神奈川県平塚市）での満開期は2月17日頃であり、‘南高’とほぼ同時期である。また、花粉は不稔性を示す（表1）。他品種を花粉親として‘翠豊’と交雑した際の結実率は、‘南高’では2014年～2016年の平均で78%、‘梅郷’では2015年と2016年の平均で81%、‘十郎’では2014年と2016年の平均で68%である（表2）。

表1 ‘翠豊’と対照品種の樹の特性および開花日

品種	樹勢	樹姿	着果部位	花粉稔性 ^α	自家和合性	満開日 ^β
翠豊	強	開帳	短果枝と1年枝	無(0%)	無	2/17
南高	中	開帳	短果枝と1年枝	中(45%)	無	2/15
白加賀	強	開帳	短果枝	無(0%)	無	2/28

^α花粉発芽率から判定した。カッコ内は2016年～2020年の平均花粉発芽率。

^β全体の8割が開花した日。育成地（神奈川県平塚市）における2016年～2020年の平均。

表2 ‘翠豊’と他品種の交雑時の結実率

交雑組合		2014年	2015年	2016年	平均
翠豊×南高	交雑花数(個)	20	20	55	
	結実率(%)	75	85	75	78
翠豊×梅郷	交雑花数(個)	-	20	45	
	結実率(%)	-	80	82	81
翠豊×十郎	交雑花数(個)	20	-	40	
	結実率(%)	60	-	75	68



図1 ‘翠豊’の着果状況



図2 ‘翠豊’の果実外観

2. 果実の特性および収量

‘翠豊’と対照品種の果実特性および換算収量について、2016年～2020年の平均値を表3に示した。‘翠豊’の収穫盛期は6月4日で、‘白加賀’と同時期に収穫される品種である。収穫果中の2L規格果率は84%、果実重は31.8gであり、‘白加賀’と同程度の大粒となる。果形は短楕円形で、陽光面の果皮着色は‘南高’より少なく‘白加賀’と同等である。核重率は10%程度である。ヤニ果発生率は2%程度で‘白加賀’より少ない（図2および表3）。

10a当たりの換算収量は2016年～2020年のすべての年で2.0t以上であり、‘白加賀’より高く‘南高’と概ね同等である（図3）。

3. 栽培上の留意点・普及性

病虫害発生は少ない傾向であり、慣行防除で対応可能である。自家結実性は低く、花粉不稔性のため、栽培には受粉樹として‘翠豊’と同時期に開花する自家和合性品種または花粉稔性を示す2品種以上と混植する必要がある。

‘翠豊’の収穫期は‘白加賀’と同時期で、収穫果中の2L規格果率は‘白加賀’と同程度で‘南高’より高く、ヤニ果発生率は‘白加賀’より低い。また、10a当たりの換算収量は2016年～2020年のすべての年で2.0t以上となり、高収量が見込まれるため、‘白加賀’の代替品種として導入が期待される。

表3 ‘翠豊’と対照品種の果実特性および換算収量

	収穫 盛期 ^z	果皮着色 (陽光面)	果形	換算収量 ^y (t/10a)	果実重 ^y (g)	核重率 ^y (%)	ヤニ果 発生率 ^y (%)	2L規格果 率 ^x (%)
翠豊	6/4	少	短楕円	2.8	31.8	10.4	2.0	84
南高	6/19	中	短楕円	3.0	34.5	8.8	1.0	62
白加賀	6/4	少	短楕円	0.9	31.7	8.4	6.1	83

^z 収穫果数が全体の半数を超えた日

^y 育成地（神奈川県平塚市）における2016年～2020年の平均

^x 収穫果中の直径が36mm以上の果実の割合で育成地（神奈川県平塚市）における2016年～2020年の平均

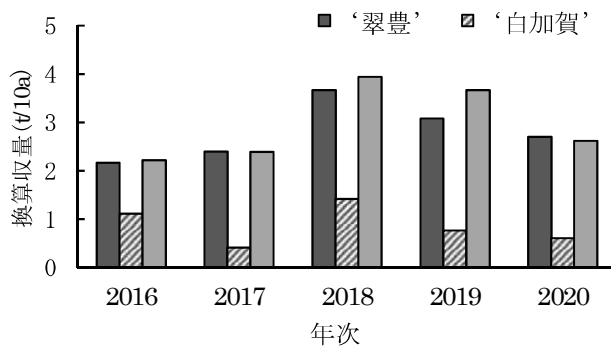


図3 ‘翠豊’と対照品種の換算収量の推移

命名の由来

果皮の鮮やかな緑色を表す「翠」に、豊産性を表す「豊」の字を加え‘翠豊’と命名した。

引用文献

農林水産省. 2022. 果樹生産出荷統計.

曾根田友暁・柴田健一郎・川嶋幸喜・内山真由美. 2012.

ウメ新品種‘十郎小町’および‘虎子姫’の育成経過とその特性. 神奈川農業技術センター研究報告. 155:11 - 15.